
マジックストーリー〔キュール高校の秘密〕

佐藤 光太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックストーリー「キュール高校の秘密」

【Nコード】

N1937P

【作者名】

佐藤 光太

【あらすじ】

これは私たちの世界とは違う世界に生きる一人少年の物語。

冒険者になるために冒険者育成高校キュール高校に入学したライド・ジョイン15歳。

ライドは様々な仲間に出会い成長していく。

そしてキュール高校の秘密そして本当の自分について知ることになる。

第1話 はじまり（前書き）

初投稿です。

これは「マジックストーリー」の第1部として書きます。

みなさんの反応によって続編をかくつもりです。

できれば毎日更新していきたいですが勉強などでできないこともあります。

それでも週1は更新していこうと思います。

初なのでへたなところもありますが最後まで読んでやってください。
よろしく願います。

第1話 はじまり

ここは私たちの世界とは全く違う世界。

この世界にある職業は大きくわけて3つある。

公務員、商人、冒険者の3つである。

この世界にはモンスターがいる。モンスターはめったに人の住んでいるところにこない。

だがダンジョンなどにいけばモンスターがいる。

そのモンスターを冒険しながら狩りをしていくのが冒険者である。

これは「エリフ国」という国の1人の冒険者を目指す少年の話である・・・

「母さんおれのコーヒー牛乳しってる？」

この少年が主人公ライド・ジョイン 15歳

「あゝ昨日父さんが夜のんでたよ。あれあんただったん？」

ライドの母親ポライト・ジョイン

「ちっ。またかよクソ親父」

「ほらコーヒーはいいからはやくいきなさい。初日から遅刻するき！？」

「へいへいわあゝたよ。いってきます」

そうライドは今日からエリフ国唯一の冒険者育成高校キュール高校に通うのである。

この世界には大きく分けて3つの種類の高校がある。

公務員になりたいものが通う普通学業高校。

商人になりたいものが通う商業高校。

そしてライドのような冒険者をめざすものが通う冒険者育成高校。

ライドはワクワクした気持ちを抱きながらキュール高校に向かった。

第2話 出会い

「まじか・・・」

ライドは固まっていた。

冒険者育成高校は国がお金をだして建てたためすごく大きいつくりになっている。

しかしここキール高校は大きいがすごく古い・・・
ドカッ

固まっているライドに誰かぶつかってライドはしりもちをついてしまった。

「いつて〜」

ライドが振り返るとライドより少し背が小さい美少年がたっていた。

「ああ悪いな。1年か？」

その少年はライドが立ち上がるのに手をかしてくれた。

「はい。ありがとうございます」

ライドはぶつかってきたやつに切れてやろうと考えていたが先にあやまられてしまったし先輩のようなのでさすがに怒れなかった。

「どうせこの高校のボロさにあきれてたんだろ。おれも最初はそう思った。」

おれはここキール高校2年のサイコ・クライスだ。なにかあったら聞いてくれ。お前名前は？」

サイコはイケメンだ。欠点は・・・チビなところくらいである。

「おれはライド・ジョインです。これからよろしくお願いします」

ライドはいつもは敬語など全く使わないので少しぎこちなく話していた。

「おれには無理に敬語使わなくていいぞ。先生にはきをつけろよ」

「そう？おれ敬語苦手なんだよ。これからよろしくな。サイコ！」

「呼び捨ては認めてないぞ。いきなり態度かえやがってかわいくない後輩だな！」

サイコは冗談まじりにライドにいった。

「まあーいゝじゃん」・・・

その後ライドはサイコとメアドを交換してわかれた。

「サイコチビだけどいいやつだな」

「うんそうだね」

「ああ・・・ってお前だれだよ」

ライドの隣には長身で黒縁メガネでいかにも優等生そうな少年が立っていた。

「あついきなりごめん。ぼくはシャイン・フリート。リードワークス中学出身です」

「リードワークスって私立はしってるけど公立もあつたんだな。知らなかったよ」

「ちがうよ。ぼくはその私立リードワークス中学校出身。君は？」

「まじかよあの名門私立が・・・おれはライド・ジョイン。クロノス中学出身だ。よろしくな」

「うんよろしくね」

「ってゆーかシャインはなんで冒険者育成高校のここに入学したんだよ!？」

この世界ではリードワークスのような名門私立にいくような子はもう将来は公務員のエリートかすごく大きい商業会社をやる者ばかりだ。なので高校は基本的に普通学業高校か商業高校だ。

「ぼくは冒険者になりたかつたんだ。中学は親に言われていっただけだよ」

（こいつんちすげー金持ちだな・・・たぶん）ライドはそう思った。そんな話をしていたら二人の周りにはさっきまで1年生がたくさんいたが二人だけになっていた。

「シャインこれやばくねーか？おれら完全においてかれてるぞ」

「そうだね。確か新入生は受け付けにいいばいんだと・・・あつあつたあれだよ」

受け付けにはもう生徒はいなかった。

「うわぁーこれ絶対ペケだよ」

「急いだほうがいいよ」

「すみません」

もう受け付けの人は終わったつもりの方だった。

「あらごめんなさい。あと二人いたの？出身中学と名前をいって」

「リードワークス中学出身のシャイン・フリートです」

「リードワークス！？」

受け付けのおばさんは驚いている。（まあそれもそうだ）ライドはそう思っていた。

「はいなにか？」

シャインはなにに驚いているかわからないようだった。

「あつじやああなたたち二人部屋でいいかしら？普通は5、6人部屋なんだけど人数あわせもあるから」

（なんててきとーなおばさんだ。だがそのおかげでシャインと同じ部屋になれた。ラッキーだ）

「はい。いいよねライド？」

「ああ」

「それで君は？」

「クロノス出身のライド・ジョインです」

「ああ。あつそう」

「君はリードワークスじゃないんだ？」みたいな顔をしてる。

「んじや部屋番307ね。その左側が男子寮だから。三階ねっ！」

その寮は見た目はクソボロかったが中は案外きれいだった。

「307・・307・・ここだね！」

部屋の中もきれいだった。

ライドはいきなり仲の良い先輩と友達ができてよかったと思った。

第3話 出会い2

「ねえーライド、ライドは最終的に冒険者の分類なにやるつもりなの？」

冒険者の中でも剣使い、魔法使い、弓使い、拳銃使い、スナイパーに分かれる。

剣使いは接近戦で相手と戦っていく。弓使い、拳銃使いは中距離戦で戦い

スナイパーはその名のとおり遠距離からライフルなどをつかい戦っていく。

魔法使いは基本的に仲間の回復が主で仲間の援護をする。

しかしすべての分類に少しの魔力は必要である。

「おれはまだ決まってるないな。シャインはきまつてるのか？」

「ぼくもいまいち・・・」

このキュール高校では、すべての分類に挑戦できるように1年生では基本魔力をあげることに重視していて分類にわかれて発展した授業はしないことになっている。

「まあ長い休みとかのときに武器をかせてくれて修行場もかせてくれるらしい。そのときに試してみて自分にあつたのをさがしていくよ」

「そうだね」

入学式というのはこの高校はやらないらしい。

すぐにクラスにいくようなのだがクラスが何組なのかをきいていなかった。

「どうするよシャイン」

「とりあえず教室のところにいったって先生にきいてみようよ」

「そうだな」

行く途中に受け付けのおばさんがいたのできいてみた。

「君たちは私のクラス。いわなかったっけ？」

（いつてねえーよ）そう思いながらも「ありがとうございます」と笑顔でいった。

それからライドとシャインは教室にあるいていった。

「てかあの先生かよ」

「そーだったんだね」

「てつきり手伝いのおばさんかと・・・」

「でもあの人でよかったよ。やさしそうで」

「そうか！？でもてきとーだぞ」

「スパルタよりはましだよ」

「そーだな」

いつのまにかライドとシャインもすごく仲がよくなっていた。

ライドは教室につくころにふと気づいた。

「ちよつとまで。あのおばさんの名前も何組かもまだわかってねえーぞ」

「あつそうだね」

「やっぱあのおばさんてきとーすぎるよー」

「しょうがないからクラスの人にきいてみよ」

「どーやって？先生の名前もわかんないんだぜ」

「そっか」

「しゃーないからおばさんくるまでまとーぜ」

ライドとシャインは先生が来るまで廊下でまっていた。

ライドは目の前のクラスの中をボーっとしていた。

するとクラスの中で本を読んでいる少女をみた。

ライドは一目ぼれしてしまった。

髪は茶色っぽい色のポニーテールでキュール高校の制服がよく似合っていた。

ライドは気づかないうちにもう少し近くでみたいと本能で思ったのか前に歩いていった。

「ライド？どこいくの？」

隣にすわっていたシャインの声も聞こえていない。

ライドは前から人が来ているのに気づかずにあるいてしまいがつつた。

「いった〜」

ぶつかっただのは赤い髪のショートの子だった。

「あつごめん」

ライドはとっさにあやまったが手遅れだった。

「あんたなに考えてんの？いきなりあるきださないでよ！バカ面してボーっとしてんじゃないわよ！」

ライドはここまでいわれてだまっではいられない。

「はあ？どこがバカ面なんだよ！お前も気をつけて前みてあるけよ！」

「なんなのよ！そっちがわるいんでしょ！」

シャインも止めに入ろうとしたときあのおばさん先生がやってきた。

「ほらいきなりけんかしてないで教室はいつて」

けんかしていたふたりは先生に出席簿でたたかれた。

「でもグラバス先生！こいつが…」

（このおばさんグラバスっつーのか）

「ほら早く教室入って」

とりあえずこれでけんかは終わった。

そのあと授業が始まったようだか今日は自己紹介だけのようだ。

「私は2組の担任のリクト・グラバス。まあテキストによろしく」

クラスの生徒のほとんどが（このクラスはずれだろ）と思っていた。

「まあ席順で自己紹介君からね！出身校と名前だけいつて」

「おれはライド・ジョイン。クロノス出身だ。よろしく」

「はいつぎ君」

「ぼくはシャイン・フリート。リードワークス出身です。よろしく
お願いします」

「まじかよ。あいつリードワークス出身だってよ!」

「なんでそんなエリートがここにいるんだよ」

みんなリードワークス出身ということに驚いてる。

「はいつぎ彼女」

・・・

ライドは自分の自己紹介が終わったので半分寝ながらあの茶色のポ
ニテールのこの番をまっていた。

「はいつぎ彼女」

「私はミラ・クライスです。ユリート出身です。よろしく願いま
す」

「ミラちゃんか。ユリートってどこにあんだろ。しらねーや」

ライドは独り言をいつていた。

「クライスって…ねえライド!」

「なに?」

「クライスってあの子サイコ先輩の妹?」

「えっ! いやないだろ! ないない」

そういいながらライドは携帯の電話帳のサイコを探した。そこには
「サイコ・クライス」と書いてあった。

「まじかよ。まあサイコカッコイイしな。いやまだ兄弟と決まった
わけじゃないし」

「いや多分そうだよ。サイコ先輩もユリート出身だし」

ライドは黙り込んでうつむいてしまった。

(ミラちゃんがサイコの妹かよ。さっき知り合ったばかりだけど知
り合いの先輩の妹が好きってどうなのよ)

そんなことを考えているともう自己紹介は最後まできていた。

「はいじゃあラスト君」

最後はあのライドとけんかした赤い髪の子だった。

「私はルナ・ラフウット。・・・クロノス出身よ。よろしく」

（あいつクロノス出身だったのか？あいついたかな。まあ人の名前と顔あんま覚えてね〜し）

ライドはそろそろ終わると思い顔を上げるとちょうどルナと目が合った。

ルナににらまれたがライドはここで騒ぎになりたくないなので目をそらした。

「それじゃ自己紹介終わったわね。とりあえず今日はこれで終わりだから明日は検査があるから寮でゆっくり体を休めてね」

グラバス先生の話が終わり解散となった。

「シャイン〜寮もどろーぜ」

ライドは後ろを振り返ってシャインに話しかけたがシャインはいなかった。

「あれ？」

シャインはミラのところについていた。

「君サイコ先輩の妹？」

「はい。兄を知ってるんですか？」

ライドは急いでミラたちの所にいった。

「ぼくはシャイン・フリート。よろっ

ドカッ

ライドはシャインに体当たりした

「俺っ、おれはライド・ジョイン。サイコとは友達だから」

「いたいな〜ライド」

「あっはいこちらこそよろしくお願いします。シャイン君大丈夫？」

ミラはシャインに手をかした。

「あっありがとうね」

ライドはそれをみて完全に嫉妬している。

「私、同じ中学出身の人がいなかったたのでこれからよろしく願います。シャイン君と…ラルド君？」

「ライドです」

「あっミラちゃんメアド交換しよ」

シャインはライドがミラにきくまえにメアドを聞いた。

「はい。それじゃ私も寮に戻ります」

ミラは走って行ってしまったのでライドは聞くことができなかった。
ライド寮にもどろ」

ライドはシャインを軽くにらんでふてくされてる。

「どうしたの？ライド」

「ミラちゃんのメアド教えろよ！」

「なんで？自分で聞きなよ」

「なんでシャインばっか…おれなんか名前も覚えてもらえないのに」
「まあ寮もどろー」

それから寮の部屋にもどり二人はすぐ眠りについた。
いまでも二人に迫っている恐怖にも気づかずに・・・

第4話 検査

翌日、ライドとシャインは時間ギリギリにおきた。

シャインはリードワークス出身なだけあって準備が早い。

「ライド遅いよ！ばくさきにいつてるよ」

「ああー悪いな」

シャインはさつさと先に行ってしまった。

「ああーでも15分までにいけばいいんだろ」

「けっこうよゆーあんじゃん」

ライドは教室まであまりあせらずに音楽をききながら歩いていった。

「ふんふんふん」

ライドはのんきに鼻歌をうたっていた。

そろそろ教室に着くときに後ろからルナが走ってきた。

ドカッ

「あんななに気持ち悪い鼻歌うたってんのよ！遅刻しちゃうでしょ！じゃま」

ライドは転んでしまいライドが言い返す前にルナはいつてしまった。

「なんだよ。あの女。やべー時間ねーし」

そのときにはもう13分だった。

ライドも走り出した。だんだんルナに近づいていき教室についたのはほぼ同時だった。

「セーフ！あんたのせいで遅刻しそうだったでしょ！」

「こっちのセリフだ！いきなり人をふつとばしやがって。まあギリセーフでよかった」

「あんたはアウトよ」「なんでだよ。お前がアウトだろ！」

「どっちもアウト。今日居残り掃除ね」

後ろにはグラバス先生がたっていた。

「先生。こいつが悪いんすよ」

「いいから席つきなさい。まずは席替えするから」

ライドは少しテンションがあがった。
(ミラちゃんとなりだといいな)

...

しかしそんな希望は叶わない。

しかも1番いやな相手がとなりになってしまふ。

「まじかよ・・・」

「ありえない。最悪」

そうライドのとなりはルナになった。

しかもミラのとなりにはシャインがいる。

「よろしくね」

「こちらこそ」

仲よさそうにシャインとミラがはなしているところみてまたライドは嫉妬している。

「なんでシャインばつか・・・」

それをルナにきかれてしまった。

「ふーんあんたミラのこと好きなんだ」

「はっ。違うから！」

「そうですって顔に書いてあるぞ」

「うるせーよ」

「そこまたうるさいよ」

グラバス先生に怒られる。

「えーじゃあ検査があるから体育館いくよ」

「検査つてなにやんだよ？」

「あんたそんなことも知らないの？自分の基礎魔力とか測定すんのよ」

「ふーん。お前意外とものしりなんだな」

「ふん！あんたが知らないだけよ」

「あの二人って意外に仲良くない？」

「そうですねー」

シャインとミラはライドとルナをみてそんな会話をしていた。

「中学校同じだからじゃないですか？」

「あっそっか」

それから体育館に向かった。

体育館に行く途中でシャインが話しかけてきた。

「ねーライド中学のときからルナと仲いいの？」

「えっ。てかあいつほんとにクロノス出身かな！？おれクロノス人だったきがするんだよな」

「ふーん。ライドが忘れてるだけじゃない？」

「そーかな」

体育館について検査が始まった。

検査は腕になんか巻かれたりして数値を見ているようだった。

体育館の下から何か咆哮のようなすごい鳴き声がした。

「なんだいまの？」

しかし誰も気づいていないようだった。

時間は長かったが特につかれることはなく終わった。

「それじゃ2組は全員終わったから教室もどつてねー」

グラバス先生にいわれて教室にもどった。

ライドたちが教室に戻る頃・・・

暗闇の中で女がなにかにいつている。

「駄目じゃない。いきなり鳴いたりしちゃ。まだよ。時がくれば暴れさせてあげるから。」

そう時がくればね・・・」

第5話 居残り掃除

グラバス先生にいわれて教室にもどった。

それから早速に授業は終わった。

「じゃあまた明日。明日から本格的に授業始まるからね。ライド君とルナさん以外解散ね」

忘れていた・・・ライドとルナは居残り掃除をしなければならないのだった。

「まじかよ。こいつとかよ」

「こつちのセリフ！」

「それじゃみんなが教室でたら教室掃除しといて、終わったたら私のところにいいにきてね」

「はあ」

ライドとルナほぼ同時にため息をつく。

「じゃあライド先に寮戻ってるよ」

「ああ」

「ミラちゃんいこっ」

「はい」

シャインとミラはいつてしまった。

（なんでミラちゃんといっしょにいくんだよ！）

そんなことを考えていると急にルナが

「またあのシャインって子に嫉妬してるんだ」といった

「はっ！？なんでだよ！」

「だってミラちゃんのこと好きなんでしょ？」

ルナはライドをおちよくるように言う。

「なっちがつっ」

「その反応で普通にわかるっつの」

ライドはごまかすことをあきらめた。

「そんな俺わかりやすいか？」

二人とも掃除を始めた。

「わかりやすいわよ。バレバレ。すぐそのバカ顔にでるわよ」

「だからどこがバカ顔なんだよ」

「その顔よ！」

「うるせーなこれでも中学ん時はそこそこモテたんだからな！彼女もいたし…てかお前クロノス出身なのかよ！お前いた？何組？」

「はぁよりによつてこいつが唯一のクロノス出身か」

ルナはつぶやいたがライドには聞こえていない。

「ああ？なんかいったか？」

「同じ中学出身の人忘れるなんてサイテーっていったのよ！バカ」

「うおっ！ごめん」

「あんた先生に報告してきなさい。もう終わったからあたし寮に戻るから」

「あっおいおれがいくのかよ」

ルナは小走りでいってしまった。

「まじかよ…」

ライドはしょうがないので職員室にいきグラバス先生に掃除が終わったことを告げて寮にもどった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1937p/>

マジックストーリー〔キュール高校の秘密〕

2011年10月8日11時02分発行